

がん患者は年々増加の一途をたどり、長年日本人の死因の1位を占めている。医療、介護の現場でも理学療法士が対象として接することも増えてきている。理学療法士が関わる場合には、がんに関連した問題と発生した部位による問題との両面を考慮した取り組みがより一層必要とされる。今回の特集では、がん患者に対するリハビリテーションの役割やスタッフが関わっていくうえで考慮すべき心の問題、理学療法を実施するうえで共通する問題などについて解説していただいた。

■がん患者の治療/ケアにおけるリハビリテーションの役割（田沼 明論文）

がん患者数の増加に伴い、がん患者へのリハビリテーションの重要性が認識されるようになっていく。がんのリハビリテーションには予防的リハビリテーション、回復的リハビリテーション、維持的リハビリテーション、緩和的リハビリテーションがあり、がん患者のあらゆる病期に対応することができる。がんのリハビリテーションを進めるうえでは、がん患者特有のリスクを理解し、適切に管理する必要がある。

■がん患者の心の問題とリハビリテーションへの期待—サイコオンコロジーの知見から（竹内麻理, 他論文）

がんの病名告知からはじまる闘病生活は、多くのストレスに曝されることとなる。その結果、不安や抑うつを呈するがん患者は多い。本稿では、リハビリテーションの実践において、サイコオンコロジーの観点から必要と思われるがん患者の精神・心理的問題を取り上げ、リハビリテーションに期待することについても触れながら概説した。

■がん患者の体力消耗状態に対する理学療法の進め方（額田愛子論文）

がん患者における疾患自体による体力消耗状態、治療に伴う体力消耗状態などの問題と発生しやすい廃用症候群について概説し、日頃から実践されている効果的な理学療法の進め方や配慮すべきポイントについて提示する。

■転移性骨腫瘍のある患者の理学療法の進め方（中村大輔, 他論文）

転移性骨腫瘍のある患者に対する治療は、残された時間に限りのある患者のQOLをいかに高めるかがポイントとなる。理学療法士は、患者の全体像を正確に捉え、疼痛の増悪、病的骨折などのリスクを管理しながら個々の患者にとって最適な動作を指導し、安全・快適に日常生活を送れるようにサポートすることが求められる。

本稿では転移性骨腫瘍について概説し、理学療法の実践について述べる。

■造血幹細胞移植患者における理学療法介入の意義（井上順一郎, 他論文）

がんのリハビリテーションでは、血液腫瘍により化学療法や造血幹細胞移植を行う患者に対して、原疾患によりもたらされる障害、および化学療法、放射線療法、造血幹細胞移植などの治療に伴う合併症により生じる障害に対して、予防も含め積極的なリハビリテーション介入が求められている。本稿では、造血幹細胞移植の概要、リハビリテーション介入の意義、先行研究やわれわれの臨床研究で現在までに得られている知見について概説した。